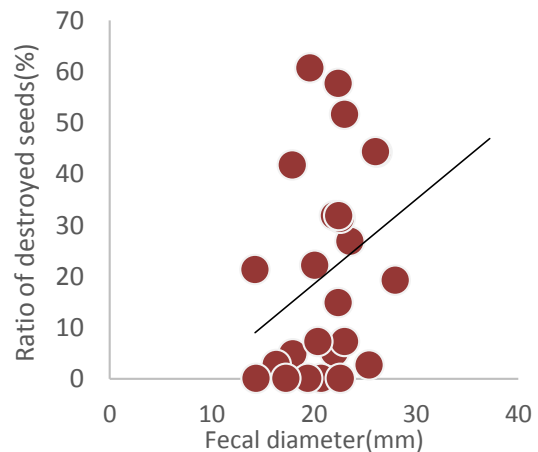


「霊長類学・ワイルドライフサイエンス・リーディング大学院」による派遣研究者報告書

(当経費の支援を受けての出張後、必ずご提出ください)

平成 27 年 6 月 1 日	
所属部局・職	霊長類研究所・修士課程学生
氏名	石塚真太郎

<p>1. 派遣国・場所 (○○国、○○地域)</p> <p>鹿児島県屋久島</p>
<p>2. 研究課題名 (○○の調査、および○○での実験)</p> <p>屋久島実習</p>
<p>3. 派遣期間 (本邦出発から帰国まで)</p> <p>平成 27 年 5 月 23 日 ~ 平成 27 年 5 月 29 日 (7 日間)</p>
<p>4. 主な受入機関及び受入研究者 (○○大学○○研究所、○○博士/○○動物園、キュレーター、○○氏)</p> <p>杉浦秀樹氏</p>
<p>5. 所期の目的の遂行状況及び成果 (研究内容、調査等実施の状況とその成果：長さ自由)</p> <p>写真(必ず1枚以上挿入すること。広報資料のため公開可のもの)の説明は、個々の写真の直下に入れること。 別途、英語の報告書を作成すること。これは簡約版で短くてけっこうです。</p> <p>今回の屋久島実習は、フィールドワークからフィールドで持ち帰った試料の分析までを経験することを目的とし、以下の日程で行われた。</p> <p>2015/5/23 集合、ガイダンス 2015/5/24-27 予備調査 2015/5/28 発表会 2015/4/29 エクスカーション、解散</p> <p>この実習はサル班、シカ班、キノコ班、昆虫班に分かれて行われた。私はサル班に属し、班員と協力して「ヤマモモにとってサルは種子散布者か捕食者か？」というテーマに取り組んだ。</p> <p>ヤマモモは5月から6月に熟する甘酸っぱい味の果実である。この時期屋久島のサルたちは多くのヤマモモを採食し、糞中には多くのヤマモモの種子が含まれている。一方でこれらの種子は、噛み砕かれているものと砕かれていないものがある。噛み砕かれていない種子についてはサルによって種子散布されている可能性がある一方で、噛み砕かれている種子については捕食されていると考えられる。また、これらの割合は採食するサルの身体サイズによっても異なっている可能性がある。そこで実習では、フィールドで採取したサルの糞の大きさとその内容物から、サルの身体サイズとヤマモモ種子との関係を調べた。私は今まで霊長類と他種の生物との関係に着目したことがなかったので、そのような関係に焦点を当てた研究を行う良い機会であった。</p> <p>方法としては、主にフィールドで糞を集めることおよび実験室で糞分析をすることによって調べた。フィールドで採取したサルの糞の直径を測った後、噛み砕かれていないヤマモモ種子と噛み砕かれた種子の乾燥重量を測定した。糞の中からは驚くほどたくさんヤマモモの種が出てくるものもあれば、ほとんど出てこないものもあった。糞分析は忍耐のいる作業であったが、改めてサルがヤマモモを食べていることや、量および噛むか噛まないかで個体差があることが実感でき、良かったと思う。</p> <p>結果としては、糞の大きさとヤマモモ種子の中で砕かれた分の割合の間で有意な相関が見られた。この理由としては、大きな糞をする個体は噛む力が強く、ヤマモモ種子を砕いて食べやすいためだと考えられる。また、両種の種子の硬さおよび種皮の厚さを測定したところ、硬さ、厚さともに砕かれていないものの方が砕かれているものよりも有意に高かった。このことは、ヤマモモ種子自体の性質によってサルに噛み砕かれるか否かが異なってくることを示唆している。今後はヤマモモの色などの形質が、種子散布されるか捕食されるかにどのような影響を与えているかなどを調べたいと思う。</p>



「霊長類学・ワイルドライフサイエンス・リーディング大学院」による派遣研究者報告書

(当経費の支援を受けての出張後、必ずご提出ください)

また、ヤマモモのテーマとは別にゲノム実習で用いる DNA サンプルの採取を試みた。個体追跡を行い、追跡中に行った糞から DNA を取得した。糞中の DNA は微量であり、採取に成功しているかはわからないが、今後自分の研究の上で必ず必要になる手法の練習をできたことは良い経験になったと思う。

最後に、屋久島実習では多くの初対面の外国人と生活を共にした。毎日ベジタリアンに配慮した食事を摂り、日常会話は英語であった。このような環境で、異文化の一端に触れられたことやよかったと思う。また、多少英語の力が乏しくても、相手と理解し合おうという意味と、ゆっくり話し合う、あるいは筆談をするなどの工夫があれば、コミュニケーションを取れるのだと感じた。一方で議論の際、英語では自分の伝えたいことを十分に伝えることができず、改めて英語力の無さを感じた。今後は英語力、それも特に聞く力を鍛えることが必要だと思う。また、実習でははじめて純野生の霊長類の個体追跡を体験できた。サルはヒトが登るのが困難なような崖を登ったり、詳細な行動の観察が困難な高く、葉の茂る樹上に上ったりし、改めて個体追跡の難しさも感じた。将来の研究では、一度の観察で欲張って多くのことを観察しようとせず、確実に知りたいこと of データを取るようすべきだと思う。



野生のヤクザルの群れ



実験室で糞分析する様子



最終日の火山の噴火

6. その他 (特記事項など)

本実習は、PWS リーディング大学院プログラムの支援を受けて遂行できました。PWS プログラム、実習の統率をしていただいた杉浦先生および各スタッフに感謝申し上げます。